児童の対人葛藤場面の原因認知における注視部位の検討

○木村あやの

(昭和女子大学生活心理研究所)

キーワード：対人葛藤場面、注視部位、視線運動

Fixation Areas in Causal Cognition in Interpersonal Conflict Situations in the Case of Children

Ayano KIMURA

(Institute of Psychological Studies, Showa Women's Univ.)

Key Words: Interpersonal Conflict Situations, Fixation Areas, Eye Tracking

目 的

表情は豊かな社会生活を営む上で欠かせない非言語的コミュニケーション・ツールである。私たちは表情によって他者との心理的な交流や調整を図り、円滑な対人コミュニケーションを行っている。とくに、複数の人が関わる対人葛藤場面において、その原因認知には表情の適切な読み取りが必要と考えられる。しかし、自閉症スペクトラム児は、この表情認知の処理方略が定型発達児と異なり、それが他者とのコミュニケーションを困難にしている可能性が指摘されている(神尾他, 2003)。自閉症スペクトラム児が苦手とする、人間関係を含む場の理解のスキルを向上させる手がかりを得るため、本研究では、第一段階として、定型発達児を対象に人の表情を含んだ対人葛藤場面の状況図に対する注視部位について検討する。具体的には、状況図中の人物の顔に注視点が集中することが予想される。

方 法

実験参加者 都内小学校に在籍する児童 24 名 (平均年齢 10.8 歳 ($SD = 0.50$)、男子 6 名、女子 18 名)。全員裸眼または矯正で正常な視力であった。

実施時期 2012 年 2 月

状況図 対人葛藤場面の状況図として、標準高次視知覚検査(日本失語症学会, 1997)に収録されている図版を用いた。この図版には、3 人の子どもとドーナツが描かれており、ドーナツの数を巡って 1 人の子どもが濡れ衣を着せられている場面が示されている。

実験装置 注視部位の測定には、Tobii 社の注視部位計測装置 Eye-Tracker1750 を用いた。図版の提示および視線運動データの解析は、Eye-Tracker データ取得・解析ソフト Tobii Studio 2.0.6 を用いて実施した。

手続き 実験参加者をディスプレイの正面に着席させ、キャリブレーション課題を実施した。観察距離は 52cm であった。その後、状況図提示し、検査の教示どおり「この 3 人の中で何が起っています。何が起っているのでしょうか。詳しく説明してください」と伝え、実験参加者の回答を促した。実験中は Eye-Tracker で実験参加者の注視部位を測定する他、IC レコーダーで反応内容を録音し、内容を分析した。実験実施にあたり、事前に本人と保護者の両者に実験内容について十分説明し、同意書をもって了承を得た。

結 果

実験参加者の回答を、標準高次視知覚検査マニュアルに従い、3 群に分類した。すなわち、正しく状況図の主題の説明ができた群 (把握群 $N=16$)、2 者関係の説明はできたが主題の説明ができなかった群 (把握不十分群 $N=3$)、状況の説明が主題からかけ離れていた群 (把握困難群 $N=5$) であった。把握群の回答例としては、「真ん中にいる女の子のドーナツを、左側にいる男の子が食べてしまったが、それを食べた犯人を、真ん中の女の子が、右の女の子じゃないかと疑って、女の子が違うと言っている。」というもので、把握不十分群は、「真ん中の子が、右の子が自分のドーナツを一つとったって言う

て怒っていて、一番左側の人は食べている。食べ終わっている。嬉しい顔。」、把握困難群は、「真ん中の人が、食べ物を右の人に食べてほしいみたいな感じかな」などであった。

状況図への主な注視部位は、左男子顔・中央女子顔・右女子顔・左男子ドーナツ・中央女子ドーナツ・右女子ドーナツの 6 領域であった(図 1)。この 6 領域を均等の大きさに設定し、それぞれの領域別に各群の平均注視時間の差について検討するために、一元配置分散分析を行った。その結果、濡れ衣を着せられている子ども(右女子)の顔への注視時間について、各群の効果は有意傾向であった($F(2, 21)=2.97, p<.10$)。多重比較の結果、把握群と把握困難群との間で統計的に有意差があり、把握群は平均 483ms 注視していたのに対し、把握困難群は平均 258ms であった。また、濡れ衣を着せられている子ども(右女子)のドーナツへの注視時間について、各群の効果は有意であった($F(2, 21)=3.95, p<.05$)。多重比較の結果、把握群および把握困難群と、把握不十分群との間に統計的に有意差がみられ、把握群は平均 192ms、把握困難群は 136ms 注視していたのに対し、把握不十分群は平均 445ms であった。

Figure 1 状況図における注視部位の例

考 察

以上の結果から、対人葛藤場面に対する状況理解において、予想どおり人物の表情に視線が集中することが明らかとなった。また表情以外の重要な手がかりにも目を向けることで、適切な状況理解が進むと考えられる。主題の「濡れ衣」の理解には、その根拠となる濡れ衣を着せられている人物(右女子)の顔から得られる情報が重要であると推測される。また、右女子のドーナツへの注視時間は、状況把握が不十分な群のみが他の群に比べて長く、状況図の部分によっては長く注視することが必ずしも適切な状況把握につながらないと考えられる。また、実験参加者の約 20% が状況図の説明が困難であり、通常学級に在籍する児童でも、対人葛藤場面の理解が困難な場合があることが示された。現在、学校現場では自閉症スペクトラム障害等、他者との円滑なコミュニケーションが苦手な子どもの支援について早急な対応が求められており、本研究結果をもとに、今後具体的な支援方法について検討が必要である。

引用文献

- 神尾陽子, Wolf, J. & Fein, D. (2003). 高機能自閉症とアスペルガー障害の児童青年の潜在的な表情処理: 表情は認知をブライムするか? 児童青年精神医学とその近接領域, 44(3), 276-292.
日本失語症協会 (1997). 標準高次視知覚検査.
*本研究は平成 23 年度科学研究費補助金(若手 B 課題番号 22730520)の助成を受けた。